私は都市や建築のモジュール化を今後の社会のスタンダートにするべきだと考えている。このビジョンを実現するために、早稲田大学建築学科で学ぶことを希望する。

私は、2016年の熊本地震で建築物が倒壊していく映像に衝撃を受け、建物や都市は簡単に壊れうるということを学んだ。またコロナ禍では同じ地域に永住するということのリスクがわかった。仮に今後コロナ禍が収束しても、今後も予想を超えていく災害が発生するだろう。そう考えるとそもそも建物を固定的に残していくという考え方が間違っているのではないだろうか。

美術部では、コロナ禍中での一つの表現方法として、一人一人が一見別々の絵を制作するが、集合すると一つの絵画が形成されるという「モザイクアート」を合作として制作した。

私はこの経験が発想転換のきっかけとなり、日本のような大災害国では、100年後に残る建築物ではなく、むしろ建築物をパーツ化し、モジュール化することで、短期間で様々な状況において自在に変化、移動、組み換えが可能である動的変化を続ける建築物および都市になるべきであると考えるに至った。

これまでも、見た目の動的変化が自在に可能であるニューヨークブリックリンのモジュール式タワーや、機能的な動的変化が自在である藤本寿徳さんの「芦屋の家」や鈴木了二さんと吉村昭範さんの「物質施行59官舎プロジェクト」などのモジュール化の試みが行われてきた。

しかし、見た目と機能的な動的変化がどちらも両立しているもモジュール化はいまだ実用化には至っていない。これを両立させるためには高度に計算された設計や、最適な工法や素材の研究、また人々が便利かつ快適に過ごせる生活空間への多大な知識が必要であり、これらが私の研究目標である。

欧州は成熟型都市について、東南アジアはIT化都市について、日本より圧倒的に先んじており、私の研究に必須であるのはこのような都市建築の先行事例である。調べてみたところ、このような国内外と過去と未来への広い視野を持ち、先行的に研究をなさっている藤本寿徳さんや鈴木了二さんのようなOBの方がいらっしゃり、意匠と数値の両方を強く兼ね備えているところは、貴学部が最も優れていると感じた。

調べる過程でAO入試という存在を知り、私の研究目的と熱意を強く理解していただくためには、一般入試や学内推薦ではなく、AO入試が適していると考え、選択した。